



防波堤は見た目が立派なので大丈夫と思いますが、津波は想定を上回るこ

東日本大震災の想定を超えた大津波は、防波堤の防御機能の限界を見せつけた。これをどう受け止めるべきか、京大防災研究所の間瀬肇教授（沿岸災害）＝写真＝に聞いた。（聞き手・林勝）
—今回の震災では巨大な防波堤がありながら大勢が犠牲となった。

京大防災研究所(沿岸災害)

間瀬肇 教授

壊れにくい工法を

月に起きたチリ地震で、気象庁は一時、日本列島の太平洋側全域で大津波と津波警報を発表したが、避難しなかった人の方が多かった。

「たのか」を振り返って対策を考える反省会や防災の勉強会を各地で開き、学習の場として生かす工夫が求められる。
—海辺の人々に普段から気にか

「防波堤については、どんな課題が浮かび上がったか。津波が想定を超えて襲っても、壊れにくい防波堤にすることが必要だろう。破壊されなければ、浸

水量を抑えられて被害を少なくできる。防波堤が破壊された地域では被害が甚大になった。
—弱点があったのか。海側の基礎は波の浸食に耐えるため強く造ってあるが、陸側の基礎の強度の確保はそれに比べて重視されてこなかった。そのため、防波堤を越えた大量の海水が陸側の基礎部分をえぐり、破壊につながったとみられるケースがある。大津波を防ぐ防波堤の新規の建設や既存の施設の補強に、この教訓を生かすべきだ。

とがあり過信はいけない。津波警報が出たら早く高台へ避難することが最も大切だ。
ただ、避難を言うのは簡単だが、実際は難しい。二〇一〇年二

「津波は予想より小さくて済んだが、「避難して損した」と思った人もいたのでは。それでは防災意識が根付いたことにならない。「なぜ避難しな

けてほしいことは。もし、大きな津波が来たらどこへ避難したらいいか、あらかじめ家族で決めておいてほしい。私は旅行で海を訪れる時でも、高台や強度のある建物など避難に適した場所をその都度見つけるようにしている。自分で身を守る意識の習慣化が大切だ。

「防波堤が来たところへ避難したらいいか、あらかじめ家族で決めておいてほしい。私は旅行で海を訪れる時でも、高台や強度のある建物など避難に適した場所をその都度見つけるようにしている。自分で身を守る意識の習慣化が大切だ。

防波堤 — 識者に聞く

家族4人久々そろう

「ただいま」。7月末、東京の体育大学に進学した梨奈さんが帰ってきた。9月末までの夏休み、一家4人は一緒に暮らせる。

両親と妹が避難で各地を転々とする間、梨奈さんも新しい環境に慣れるのに必死だった。寮のルームメイトとの生活時間の違

い、レベルの高い講義と試験…。得意の陸上競技を生かして進んだ道は、戸惑いと刺激に満ちていた。

福島と東京との心の距離も感じた。「原発事故で家族が避難してるんだ」。大学の仲間に打ち明けても、反応の多くは「ふーん、そうなの」。震災から時間がたつにつれ、自分から被災の話はしなくなった。

だから、たとえ大熊町の自宅から100*。近くも離れた仮設住宅でも、ありのままの

いつの日か

原発1*からの避難

自分でいられる場所は何物にも替え難い。「お母さんのつくった空揚げが食べたいな」。長女の口から出る久しぶりの注文に、台所に立つ幸さんの顔がほころぶ。沙也加さんも、まるで幼い子どもに戻ったように姉とじゃれ合う。新しい仕事に追われる光一さんは、時間があれば梨奈さんを犬の散歩に誘う。

いつもの家族旅行も、お盆の墓参りもできない夏だが、家族のきずなまでは変わら

なかった。

そんな一家に、また新たな知らせがやって来た。原発3*。圏内の一時帰宅が始まるというのだ。

福 (はなわ) さん一家 原発事故で福島県大熊町から避難。光一さん (43) と妻幸さん (43)、次女沙也加さん (15) は豊田市で暮らし、会津若松市に移った。長女梨奈さん (18) は東京で大学生生活。